＜＜研究背景＞＞
2023年度は、群馬県太田市を対象とした在学中のチームとしてのプロジェクトを発展し、個人研究として「ロードサイド風景を歴史的景観とみなし再評価と利活用を考える」ことをテーマとして取り組んだ。

背景には、「太田風土記」において中小企業経営者にインタビューを行ったが、その中で、小学校時代の地域教育が効果を発揮していない一方、太田市に対して愛着が形成され、それは、個人の思い出に依拠していることが示唆されるとともに、太田市の風景についてネガティブな評価をしていること、一方、太田市出身の写真家吉江淳氏が、郊外ロードサイド風景に地元としての身体的感覚を持ち、肯定的に捉え写真表現活動を行っていることが分かったことがある。

よって、ロードサイド風景が歴史的景観となる可能性を検討し、再評価と利活用を考えることを通じ、地元に対する愛着意識の形成を研究するとともに、住まう人が地元の風景を肯定的に捉えられる方法を模索することとした。

＜＜研究提案＞＞

地域の何気ない日常を言語として表現し、再評価を試みるため、地域の日常の暮らし、地域への愛着に繋がる体験を言語化することで、地域への誇りを高める、以下のプロジェクトを考案した。

タイトル：『2500年の博物館～21世紀の日常の暮らし展～』プロジェクト

【プロジェクト概要】

対象：高校生

内容：日常生活の中でよく行く場所（ショッピングモール、塾、ゲームセンター、ファーストフード店など）について、自分たちが2500年後の博物館の学芸員となったつもりで、写真や資料を収集し、解説文を書く。

展示：収集された資料や解説文は、「2500年の博物館～21世紀の日常の暮らし展～」として、実際に学校内または地域の公共施設で展示予定

主催：京都芸術大学大学院学際デザイン研究領域研究員　村井裕一郎（1名）

【プロジェクトの背景】
　これまで、京都芸術大学大学院学際デザイン研究領域にて行ってきた研究を通じ、地方郊外都市において、東京などの大都市や、あるいは函館、鎌倉など地域のブランド力を有する地域に比べると、自分の住む地域に何もないという感覚を持ち、地域への肯定感が低い傾向が見られた。
これは、全国的に使用される教科書に載るような有名史跡や文化財のような特別なものこそが歴史的な資産であるという認識が根強いことが伺えた。特に、先鋭的な大都市でもなく、また、農村部と比べ自然が豊かに残るわけでもない、どちらにも属さない郊外地方都市の日常は、いわゆるロードサイド型店舗による画一的な風景として評価される傾向が強く、地域としての特徴が見出しにくく、これが地域への愛着や特別感、肯定感の低下に繋がっていると考えた。

そこで、若者に対して、それぞれの地域の生活に密着したものこそが地域固有の歴史的な資産として価値を持つものであり、また、地域の日々の営みに価値を見出すことで、地域への愛着や、地域での暮らしに肯定感をもってもらうことを目的とし、本プロジェクトを考案した。

【本プロジェクトの効果】
・生徒が歴史的な遺産として直感的にイメージするものではない自分たちの日常を客観的に描写する作業を通じて、自分たちの日常に肯定感をもつことができ、地域に対する愛着や肯定感が高まる

・歴史的な遺産とされるものも、それが存在した時代には日常の中で使用されていたものであり、「21世紀の自分たちが歴史として学ばれる側」という疑似体験を通ずることで、地域に残る歴史的な遺産に対して、より親近感を持って想像を膨らませる力を養う

＜＜研究結果＞＞
上記提案を、実際に私の居住する愛知県豊橋市の高校に提案した。また、豊橋市美術博物館の学芸員の方にも協力を依頼した。
しかし、当初は実施の可能性が模索できたものの、受け入れ高校側の学校行事日程の変更により、2023年度の実施が難しくなり、翌年度以降に持ち越しとなった。

＜＜今後の研究計画と課題＞＞
上記提案を実施する。

提案

・地域の何気ない日常を言語として表現する　→**「2500年の豊橋博物館プロジェクト」**

2017年、イトーヨーカドー豊橋店閉店に、市民6000人からの寄せ書き、閉店セレモニーに市民が押しかける

寄せ書きの一部

「子供の頃から、すべての必要なものを、このお店で買ってきた」
「結婚前の夫と、ここのお店を待ち合わせの場所で利用していた」
「お母さんと喧嘩したあと、このお店に寄るのが習慣になっていた」
→開店38年、十分に、地域のコミュニティ施設として、文化資産として機能しているのでは？

提案2

・地域の何気ない日常を言語として表現する　→「2500年の豊橋博物館プロジェクト」

ヨーカドー閉店後に居抜きで建ったドンキ

豊橋の無形文化財「鬼祭り」

・郷土史の教科書や、観光案内の定番
・市内の知名度はある
・実際は近隣地区しか参加できず、
　多くの市民が参加しているわけではない
・衣装や道具などは、既に管理保護されている

■プロジェクトの概要

・市内の小学校高学年～中高生を対象

・「受け継がれてきた定番の文化資産」でなく、実際に自分たちがよく行く“ショッピングモール”“塾”“ゲームセンター”“ファーストフード店”など、2500年【500年後】の豊橋市の学芸員になったつもりで解説文を書いたり資料を収集する

・例『ドンキホーテ』を「21世紀初頭の民衆商業施設」として、解説文を書いたり写真を収取する、その際、地域の美術博物館の学芸員に協力をいただき、解説文の書き方の指導も受ける。

・それらを「2500年の豊橋博物館～21世紀の豊橋展～」として、実際に展示会を行う

【想定される教育上の効果】
→自分たちのリアルな生活を客観的に再評価する技能が身につくと共に、リアルな生活・日常風景に対して、価値を見出す心が醸成される